深淵に立つ癒し姫

雁緒　采加

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
深淵に立つ癒し姫

【Ｎコード】
Ｎ７２５０Ｘ

【作者名】
雁緒　采加

【あらすじ】
４０歳女が転生を果たしました。ユリアナ伯爵令嬢５歳です。
平穏な生活を送る予定だったのに元義理の息子に求婚されました。
って前世から５０年たってるはずなのに何故２０代なのでしょうか？
それに息子よ５歳の少女に求婚するのも世間的にどうかと思います。

プロローグ

亡国の王は『力』を欲した。

他国への侵略のため。
他国へ自国の脅威を見せつけるため。
より多くの富を得るため。
戦に続く戦で民は疲弊していた。

王のもとに一人の男が現れる。
魔導師を名乗る男は告げる。
強大な『力』を王の手に献上してみせようと――――

その為に生贄が必要だった。
魔獣の骸、無垢な子供達の魂、そして異邦の乙女の鮮血。

魔導師の言いなりに王は次々と生贄を集める。
ある者は王を諌め反逆者として処刑され。
ある者は己の保身の為子供達を集め生贄に差し出した。
国を守るため多少の犠牲は仕方がない王宮に住む者は皆考える。

しかし魔導師が示す『力』は王の為のものではなかった。
強大な『魔』を生み出す為魔導師は『力』を欲し王を利用したのだ。

だが、魔導師によって強大な『魔』が生み出されることはなかった。
異邦の乙女の祈りにより『力』は共に贄となっていた子供達に渡される。

乙女の死と引き換えに――――――。

彼らは『力』を使い魔導師を滅ぼす。
しかし魔導師は己の命をもって『魔』を生み出す陣を発動させる。
陣は大地深く刻み込まれ　力は弱いが多くの『魔』が生まれ出てきた。

『力』をもってしても滅しきれない『魔』に彼らは仕方なく陣の周りに封印を施す。
深い深い森で覆い、『魔』が出てこられぬように、陣が人目にふれぬように。

贄として集められた者たちは虐げられた民と共に決起し王家を廃し新たな国をつくりあげた。
『力』を得た子供の一人が建国の王となる。
新たな王は１０歳に満たない少年であった――――――。

ユーテリアス国建国記より

転生したようです

はじめに感じたのはまぶしい光。
それから暖かな温もり。
波のようにゆらゆら揺れる体が気持よくて瞼をあげれば――――

・・・だれ？この金髪のおじょーさん。
ってゆうかなんでこんなに手が小さいんだ自分。
いや、手だけじゃない、体が思うように動きません、声も出ません。
生まれたての赤ちゃんになっているようです。
どうやら転生というものをしてしまったようです。

――――――というわけで。
声は「あー」とか「うー」しか出ませんが目と耳は問題ないようで
フル活用した結果。

私の今生の名はユリアナ＝フィールゼン。
アルシャン国の伯爵令嬢だそうな。
伯爵といっても出世に興味がなく領地を村人と楽しく開拓していこ
うという父様の意向でのんびりゆったり暮らしているようだ。
両親と数人の使用人と共に王都からかなり離れた辺境の地で暮らし
ている。
１０歳年の離れた兄がいるらしいが王都の学院に入学しているため
家にはいないとのことだ。
私が初めて見たきれいなお嬢さんはやはり母様でした。
光り輝く金色の髪とエメラルドの瞳、白磁の肌。

はっきり言って超美人さんです。
１０歳の息子がいるとはとても思えません。
特に声がとてもきれいで子守唄など聞いているだけで幸せになってしまいます。
ちなみに父様も金の髪、ダークブルーの瞳のイケ面です。
まだ自分の顔は見れませんがちょっと楽しみです。

前世の記憶が正しければアルシャン国は国民のほとんどが金髪碧眼だったはずなので母様の浮気（ありえない）がなければ私の髪も金髪のはずでしょう。
もと黒髪、黒目の私としてはうれしい限りですね。

転生前のわたし

ユリアナ3歳になりました。

今はベットの上で絵本をよんでいます。
どうやら私には魔力というものがかなりあるらしく幼い体には負担が大きく熱を出してはベットの住人です。
前世の記憶というのもどうやら悪影響を与えているようで膨大な記憶が幼い脳では処理しきれずショート。
高熱に魘され寝込む。の繰り返し。
おかげで3歳までの記憶は曖昧です。
まあ、あまり思い出さないほうが精神年齢４０歳のおばさんにはいいような気がします。

ようやく魔力も体に馴染んできて高熱で魘される事もなくなりだし、両親や他の人とも言葉でコミュニケーションがとれるようになり色々な情報が入ってくるようになりました。

どうやら今住んでいる処は前世での私の終焉の地の近くのようです。

私はもともとこの世界の住人ではなかった－－－－－
地球の日本という国で小児科医をしていてあの頃は忙しくても毎日が充実していました。
ここに召喚されるまでは・・・
もう今はない国の王は『力』を欲したらしい、その為に異世界の住人の生贄が必要だったのだそうだ。

突然連れてこられ、閉じ込められた。
儀式を行うその時まで・・・

でも、そんな愚かな王にもまともな臣下だっている。
国の安寧の為に異界の者が犠牲になる事はないって城から連れ出してくれた。
元の世界には戻せないが守ってやる――――と。

召喚の時に魔導師に付けられた印によって私はこの国を出る事が出来なかった。
彼は国の辺境にある友人の元に私を連れて行ってくれた。
力のある術師らしく、彼の息子（いや～息子がいた事にはびっくりした～）を預けていたらしい。
私に付けられた印を消すことはできなかったが感知されないように封印してくれた

それから数年は平和だった。
辺境の村までは追手が来る事はなく。私は彼にプロポーズされ、いきなり8歳の子持ちになっちゃったけど本当に幸せだった。

魔導師（あいつ）が来るまでは――――

突然村に現れた魔導師は次々と村人を殺して行った。
村の子供たちと私は儀式に必要だからと捕えられた。
彼も戦ったが魔導師の手によって殺されてしまった。
私たちの目の前で――――

魔導師は儀式を行うと言って陣を描き始めた。
私にはなんの力もなかった。魔導師を阻止する事も子供たちを守る事も。

せめて子供たちだけでも守りたい！
ーーーーそう願った。
魔導師の作りだす刃が私の胸に突き刺さって、あたり一面に鮮血が飛び散り大地に書かれた陣が輝きだした
かすれゆく視線の先には真っ青な顔で泣き叫ぶ息子（あのこ）がいた。
ーーーーごめんね、巻き込んでしまって。守れなくって。

それが私が覚えている最期。

それからの事は転生してから知った。
この絵本もその一つ。
５０年前に起きたこの事件をもとに書かれた英雄王物語。

あの子たちは『力』を得て魔導師を倒したそうだ。
そして虐げられた民の為に新たな国を創った。
あの時にいた息子（あのこ）の幼馴染の二人がユーテリアスの初代王、王妃となって子供達までいるんだそうだ。
風の噂では国は安定し、国王夫婦の人気はすさまじい程なのだそうだ。
つらい過去だけど今、みんなが幸せであってくれればうれしい。

しかし息子は表舞台にはあまり出てこないらしく、今どうしているのか分かっていない。
一体どうしているのか、少し心配です。
義母（はは）としてはもう少し大きくなったら様子を見に行きたいものです。

母はどの世界でも強いのです

「まあユリアナ、またその絵本を読んでいるの？」

今日もベットの住人となった私の様子を見に来た母様は呆れ顔で手元の絵本に視線を向けてきた。

「はい、おかあさま。だって、えいゆーおうさまたちかっこいいです」

なるべく三歳児っぽく、かわいくかわいくと心に念じながら笑顔で返事をします。

「本当にユリアナはそのお話が大好きね」

ええそりゃあもう！

だって3歳児じゃあこの絵本ぐらいしか彼らの事を見る事ができません。

子供向けにはなっていますが本人たちをちゃんとモデルにして書かれているようで赤髪の戦士、銀髪の英雄王、精霊王妃はあの子達の顔を思い起こさせます。

赤髪のやんちゃな息子、ガーディアル。知的で頑張り屋のライナス。おっとりしたやさしいレイティ。

「でも絵本はお熱が下がってからにしましょう」

母様は絵本をサイドテーブルに置くと私をベットに横たえると子守歌を歌ってくれます。

子守唄を歌う時の母様の瞳はエメラルドの瞳の中に金色の輝きが見えます。
歌も素敵なのですがこの瞳がとても綺麗で私はいつも瞳を眺めてしまいます。
最近知った事なのですが、この輝きは癒しの力を使う時に現れるもので母様は子守歌を歌いながら私の体調が少しでも良くなるようにしていてくれたのです。

あ、ちなみに私の髪も金色で瞳は青と碧を混ぜたような色でした。
母様似の顔のおかげで自分で言うのもなんですが中々の美人になるにではと思っております。
思わず鏡の前でガッツポーズをして侍女に変な目で見られましたが・・・

「リステリア、ユリアナは眠ったかい？」
ノックと共に父様が入ってきました。
まだ眠くはないのですがとりあえず寝たふりをしときます。
「ええ、あなた今眠ったところよ」

母様と入れ替わり今度は父様が頭をなでてくれます。
父様の大きな手が気持よくて本当にウトウトとしてきました。

「あなた、前にお話しした魔術の先生の事ですが」
「ああ、しかしユリアナにはまだ早いのではないか？まだこの子は3歳だ」
「でも、この子の魔力は特殊です。このままでは体がもちません。大変かもしれませんが早く魔力のコントロールを出来るようにならなくては」

なんですとっー！
思わず起き上がりそうになる体を必死で抑え、両親の会話を聞いていきます。
眠気なんてぶっ飛びましたよ。

どうやら私の魔力は母様から受け継がれたようなのですが、母様曰く何かが違うようだとの事です。
母様にも分からないので専門の魔術の先生について勉強をしたほうがよいと。
母様のように癒しの魔力を持つ者は稀な上、魔力に飲み込まれ精神に異常をきたす（怖っ）のだそうだ。
３歳で早くも勉強なんてと父様は躊躇しているようですが母様の強い主張によって王都から家庭教師として魔術師がやってくる事がきまったようだ。

なんにせよ早くも勉強の毎日になりそうです。知識は必要ですから早いのはいいことです。
廃人は嫌なので魔術のコントロールは特に頑張りたいと思います。
前世では魔術なんて使えなかったから少し楽しみですね。

先生がやってきました

魔術師の先生が王都からやってきました。
カイゼル＝アラート先生です。

青白く光る瞳、つりあがり気味の目尻が少し冷たい印象を与える知的イケメン眼鏡男子様です。
首元で一つに括られた金色の髪にはところどころに白い物体が・・・・２０歳と聞いていたけど若白髪っ！まさかの若白髪なのかぁ！！・・・と思ったらどうやら生まれつきだそうです。
ご本人より説明を受けてしまいました。
不躾にガン見してしまってごめんなさい。

「伯爵夫人たっての願いによりまいりましたが、私が見る限りご令嬢には魔力を感じられませんね」
自己紹介もそこそこにアラート先生は私を一瞥するとはっきり断言してくださいました。
えっ？じゃあ今までの高熱は？
そもそも魔力って感知できるものなの？あっ魔力を持っている者同士ならわかるのかな。
母様は魔力を持っているから私の中にある魔力を感じて先生を呼んだんじゃ・・・
それとも先生の特殊能力か？
う～ん気になる事は聞いてみるのが一番です。

「せんせい、まりょくをもっているのかどうかはみただけでわかるのですか？」
「魔力を持つ者同士は視る事ができます。力の強いものは体にオー

ラが現れ。例え少量でも瞳を見れば分かります。魔力を持つ者は少々特殊な瞳をしておりますので」

なるほど、じゃあ先刻から先生の周りに渦巻いていた青白いオーラは嫌々ここへ来させられた事による不機嫌オーラではなく本物の魔力のオーラってことでしょうか？

・・・あれっ？じゃあ私にはやっぱり魔力があるって事？

瞳が特殊と言ってましたが青い瞳の奥が時折白く光ることでしょうか。

やっぱり分からない事は聞きましょう。

相手はたとえやる気がなくても今のところは私の先生なのですから。

「ーーーーー私の瞳がなんですって？」

「はい、ですからせんせいのひとみにしろいきれいなチカチカがみえます。ははさまのひとみはきんいろにひかってました」

「それが視えると？」

「はい、せんせいは、からだからもあおとしろのひかりがみえます。ははさまにはみえなかったのでせんせいのがまりょくがつよいということですか？」

先生は私の質問に答える事はなく、ものすごい勢いで両手で人の頬を挟み覗き込んできました。

ちかっ！近いです！せんせっーーーー！

鼻の頭がくっつきそうな距離ってどういうこと－－－－－！

目の前に綺麗な瞳がウットリ・・・なんて場合じゃな~い！！

「・・・・なるほど」

納得したのかようやく放してくださいました。
きっと自分、顔が真っ赤な事でしょう。恥ずかしさで憤死しそうです。
まあ、先生にしてみれば子供の顔を覗きこんだだけなのでしょうけど・・・

「先程の言葉撤回させていただきます。ご令嬢には魔力が認められます。本来魔力は体をめぐり瞳から放出されていきます。しかし何らかの原因で瞳から魔力が放出されることなく体の中に籠もってしまい、力が体に高熱となって巡ってしまってるようです」
「自家中毒みたいなことですか」
「そうですね、その例えはいいと思います。自分の魔力に――――え？」

やばっ！声に出してたようです。
先生が不審な目で見てきます。

「ご令嬢はよくそのような言葉を知っておられましたね。確か御年は3歳――――でしたか？」
「このまえ4さいになりました。ははさまがそのようなことをいってしんぱいしていましたので」

子供っぽく首をかしげながら笑顔でこたえますが、冷や汗だらだらで背筋が冷たいです。
こわいっ！この先生はヤバイです！！
昔（前世）の同級生にこんな目をした奴がいた。
『己の探究の為なら何でもしてやるぜっ』て奴だったよな。
アイツは絶対マッドサイエンティストになってるハズだ。
前世の記憶がある事がばれたら絶対実験体です。
なにされるか分かりません。

それだけは絶対避けなくては！！

「まあいいでしょう。これから家庭教師としてお世話になるのですから――――時間は存分にあるでしょう」

ニヤリと笑う先生のお顔は怖いですっ。

どこぞの魔王様でしょうか・・・・・

なにやら私の体の事も先生には面白い症例のようで嬉々として私の家庭教師をやるようです。

もう、実験体は決定・・・なのでしょうか・・・

魔術は難しいようです

魔術の練習、一般教養の勉強を始める事になりました。
何故４歳児に一般教養？と不思議に思いましたがこれは魔術に関係しているようです。

この世界には３つの『力』がある。
世界の至る所にいる精霊たちを使役する事が出来る精霊使い。
陣を描き己の少量の魔力と生贄を捧げる魔導師。
己の魔力のみを糧とする魔術師。

魔力を持つ者は少ない。
しかもその中でも精霊使いはもっと少ない。精霊に好かれる体質、魔力が関係しているらしいのだけど精霊どんな人物が精霊に好かれるかなどは分かっていない。
魔導師は闇のもの。己の少ない魔力を補うために生贄を使う為、利己的な者が陥りやすい。
もっとも多くいるのは魔術師。才能にはかなりの差があるがもともと魔術師の絶対数が少ないのでほとんどが王都の専門の学校を出た後、王宮で働くようになるらしい。

「魔力があれば魔術が使えるものではありません、魔術師は世界の『理』を知り、『源』を視て、『構築』し始めて魔術となるのです」
「ことわり、みなもと、こうちく。ですか？」
なにやら難しい話になってきました。

アラート先生の話では。
世界には『理』つまり法則があり『源』と呼ばれる魔術を使う為の材料がある。
その材料を『構築』組み合わせて魔術を発動する・・・らしい。
魔術師になるためには世界の法則にしたがい、魔力を使い術に必要な材料を集め創りだせるようにならなくてはならないということだ。
なるほど、つまり『理』を知るために必要なのが学問であり世間の常識であったりするわけで。
あとは魔力があれば『源』と『構築』が出来るってことですねっ。
はい、頭に叩き込みました。

「それで、『みなもと』とはどうすればみることができるのですか？」
魔術の基本がわかったからには気になりますね。
私はまだ『源』とやらは視えていません。

「ほう、たったあれだけの説明でご理解いただけたとは教えがいがありうれしい限りです」
アラート先生の目が怪しく光りますがここはもうスルーです！
聞かなかった事にして授業を続けましょう！

「『源』を視るにはまず体中に流れる魔力を感じ取り、その魔力を瞳に集中させてください。」
アラート先生もこちらの意を汲み取ってくれたのかそれとも何か思惑があるのかこれ以上はつっこむ事もせず授業を再開してくださいました。

目を瞑り体に流れる魔力を感じてみます。
なんだか暖かいモノが体をぐるぐる回っているような・・・これの

事でしょうか。
これを瞳に集中させて、目を開けてみます。

「・・・・・元素記号？」

目の前に光るアルファベットがあっちこちに浮いております。
ＣＯ２　Ｈ２Ｏ　Ｎ２　Ａｒ　Ｏ２
こちらの世界の文字は元いたところと同じアルファベットでローマ字表記だったので言葉を覚えるよりも楽だった事を覚えている。
えっ？でもこれってどう見ても元素記号？いや化学式？もあるのか？
空気に含まれる酸素や二酸化炭素の化学式ですよ・・・ね
もしかしてこれが『源』？

「せんせい、もじがみえます」
「ええ、それが『源』です。」

先生が右手のひらを胸の前に差し出し呪文のようなものを呟いていきます。
すると空気中を漂っていた英数字が先生の手のひらに集まりだし・・・

ボンッ！！

わっ、爆発しました！すげぇ。

「『源』の性質を見極め魔力によって引き寄せ『構築』し発動させます。『源』の性質が分からなければ魔力があっても集めることは出来ませんし、たとえ性質が分かっても魔力が足りなければ『構築』

出来ません」

魔力にも性質があり火、水、土、風にそれぞれ馴染みやすい術があり『源』の視える種類も魔力によって違ってくるそうです。
一般的にはこの４つの術を使うのが魔術師としての基本だそうです。
その中でも母様のよう特殊な魔力を持つ者のいるそうです。
先生も特殊な魔力を持つそうですがどんなモノかは教えてくれませんでした（け～ち～）。

やり方もわかった事ですし私も早速やってみようと思います。
とりあえず水を手のひらに集めてみましょう。
元素は確かそこにあるＨ２Ｏですよね。

ーーーーあれ？集まってきません。
漂う英数字に手を伸ばしてみましたが触る事も出来ません。
先生はさわったりできてるのに・・・・なんで？

「せんせい『みなもと』にさわれません」
「ああ、ご令嬢にはまだ無理ですね。体内の魔力を外に放出する事が出来ませんから術は出来ないでしょう。でもまあ視ることはできるようになりましたから、視る事によって魔力を消費出来ますから高熱に悩まされる事は無くなるでしょう」

なんですとー！！
せっかく魔術が使えるようになるとちょっぴり楽しみだったのに・・・
原因が分かるまでは『理』の勉強をがんばりましょうと笑顔で先生に言われては頑張るしかありません。

「どこまで令嬢の頭に詰め込めるか楽しみですね」
とにやり笑いと共に研究者（マッドサイエンティスト）の顔になっていたのは見なかった事にします。

魔術は難しいようです（後書き）

息子がなかなかでてきません（ＴＴ）
あらすじにいつわりありですね・・・

閑話1（前書き）

リステリア視点です

閑話1

ーーーーー愛しいユリアナ。
神様が授けくれた私たちの天使。

旦那様によく似た髪質の柔らかな髪を撫でてやると、とても気持ちよさそうに眠りにつく。
まだ幼いこの子に早くもこうして魔術の勉強をさせなければならないなんて。

この子の魔力は私のものとよく似ている。
多分、私と同じ『癒し』の属性を持っているのだと思う。
それでもこの子の魔力は表へ出る事がない。
アラート先生ですらこの子の瞳の奥まで視て初めて分かったと仰っていたわ。

外へ出ない魔力は幼い体を蝕む。
・・・でも、魔力のせいだけではなかったのだと思う。

ユリアナはよく悪夢にうなされていた。
はじめは幼い子供の夜泣きなのかと思った。
でも、あの子はいつも謝っていた。
涙を流し、いつも「だれか」に謝り続ける。
時折、耳慣れない言葉を発する事もあったけど。
「だれか」を求めて両手を空に彷徨わせる。

そして朝になれば何も覚えていないようでいつもの笑顔で挨拶をし

てくれる。
熱のせいであまり外へ出かける事も出来ずにベットの上でおとなしく絵本を読んでいた。

あの子がいつも大事そうに読む絵本。
隣国の国王の英雄譚。
５０年前に起きた史実をもとに書かれていると聞いたわ。
絵本の中の主達をいつも愛しそうに見つめて――――

――――転生者。
時折、生前の記憶を持つという子供が生まれるという。
『癒し』の魔力を持つ者に語り継がれる事。
それほど多くは無い…けれど――いる。

ユリアナも転生者なのでしょう。
それもユーテリアスの英雄王に関係している。

いつか、あの子がその事を話してくれるまでは母親でいられるのかしら――――
いつか、あの子が話してくれた後も母親でいられるかしら――――

閑話2（前書き）

カイゼル視点です

閑話2

とある伯爵令嬢の家庭教師をやることとなった。
王都から馬車で片道１８時間というかなり辺鄙なところに住む伯爵家のご令嬢だそうだ。
幼いころから魔力がありその為に高熱で寝込んでいるので魔力の扱いを教えて欲しいとの事だ。
はんっ・・・ばかばかしい。
貴族の奴らは自分の子供に魔力があるといっては魔術師（こちら）を引っ掻きまわしてくる。
自分たちの家から魔術師が出るのは貴族にとって栄誉な事だろう。
ありもしない魔力をあると言ってはこちらを呼びつけ魔力は無いと告げれば何とかしろと言ってくる。
だいたい魔力が現れだすのは5歳を過ぎてからだ。
3歳やそこらの子供に魔力なんてあり得ん。
まったく面倒なかぎりだな。

ただ伯爵夫人は確か『癒し』の特殊魔力を持っていたはずだ。
もしかすると魔力持ちという事もあり得るのか？
しかしフィールゼン家は長男が7歳の時に行った魔力判定で魔力持ちと認定され王都の学院に入学させらせたはず。
同じ血筋から魔力持ちが2人？そんなことがあるのか？
まあ、行ってみれば分かる事か。
『癒し』の特殊魔力を持つ夫人に会ってみるのは少し楽しみだ。

＊＊＊＊＊＊

会ってみた令嬢はやはり魔力を感じる事はなかった。
瞳の奥に輝きは無くいたって普通の子供だ。
その事を本人に告げてみれば令嬢は眉を寄せ何か考えているようだった。

「ーーーせんせいのひとみにしろいきれいなチカチカがみえます」

令嬢の言葉に愕然とした。
魔力の波動が視えるのか？
そんなバカな。
確かに令嬢には魔力の波動を感じない。
私の持つ特殊魔力『探索（サーチ）』はなんの反応も示していない。
『探索』はあらゆるものの性質を見る、どんな少量の魔力であろうと見つけ出しその性質が視える特殊魔力
それをも誤魔化す何かが令嬢の体にある？
いや、そんなはずは・・・

令嬢の瞳をもう一度よく見なおしてみると青碧眼の奥に金色に輝く光が渦巻いていた。
魔力の輝き、伯爵夫人と同じ『癒し』だろう。
しかし魔力は体を廻り体外に出る事が出来ないようだ。

令嬢にその事を伝えてみれば本人は体の異変についての私の説明に納得したようだった。
あまりに落ち着いた態度が腑に落ちない。
確かまだ3歳のはずだ、体の仕組みに対し知識がある？

その事の尋ねてみれば母親から聞いたのだという。
しかし先程の理知的な瞳は3歳やそこらの子供の顔ではなかった。

私の『探索』を持ってしても見つけ出す事の困難な魔力。
年齢に不似合いな態度と言動。

本人は一生懸命誤魔化しているようだが・・・
まあ7歳に行う魔力判定までまだ3年もある。
じっくりと調べていけばいい・・・・令嬢の体の謎も、本人が必死になって隠している事も・・・な。
王宮でバカな貴族どもを相手にするより有意義な日々を過ごせそうだ。

魔術はつかえるようになるのでしょうか

ユリアナ5歳になりました。
ようやく5歳・・・・長い1年でした・・・・そしてとても濃い1年でした。

よもやこの年にしてあんなに勉強・・・
ええ、大学受験の時よりも詰め込まれましたよ。
一般教養（言語、数学、地理、医学などなど）
加えて貴族令嬢の基本、礼儀作法、ダンス、等々。

政治や経済まで教えられた時には絶対、先生は私がどこまで理解できるか調べてたに違いない。

最近知った事だが先生の特殊魔力は『探索（サーチ）』というのだそうだ。
要は世界のありとあらゆるものの本質を探し出して調べつくすぜっ
――――というもののようだ。
やっぱりマッドサイ・・・・いや魔術だからちょっと違うか・・・・
私の事も薄々気づいているのかも知れないです。

母様は先生にしごかれている姿を生温かい目で見守ってくれます。
助けては下さいません・・・・何故？
「ユリアナ頑張ってね」
と聖母の頬笑みで応援されては頑張るしかないようです。

自分で言うのもなんですがかなり優秀な生徒だったと思いますよ。
言語に関しては門脇（かどわき）　由利（ゆり）（前世）の時にかなり苦労して覚えたので問題なし。

数学は前の世界とほぼ同じだったのでこちらも問題なし。
政治や経済は聞き覚えのない言葉が多くあったのですがさすが子供の脳は違うわ～。
記憶の収納スペースが多いのか意外と楽に頭の中に入ってくるようです。

問題だったのは医学。
難しくって苦労したんじゃない・・・その逆でした。
あまりにも医学が発展してない！！
この世界では人体に刃物を入れるのはタブーとされているから病気になっても薬草による治療か母様のような『癒し』魔力を持つ魔術師に治療を頼むしかないのだが『癒し』の魔術師は本当に少ないから貴族ぐらいしか恩恵にあずかれない。
由利の時も思った事だった・・・
医者と呼ばれるものは数が少なく、逃亡中に何度か患者を治療した事がある。
医療器具も薬剤も何も無い処では私のできる事なんてたかが知れてた。
薬草の効能だって、もといた世界と同じかどうかも分からない。
助けられなかった命が沢山ある———
あちら世界では当たり前のように助かる命がこちらでは失われていく———
それでも医者に看取られた事を家族は感謝していた。
それが悔しかった。
感謝される事なんて何も出来なかった。ただ「医者」という名だけで患者を看取っただけだ。
己の力の無さを実感した。

由利には出来なかった事。
ユリアナになら出来るのだろうか？

ユリアナには母様と同じ『癒し』の魔力があるらしい。
未だ現れない私の魔力・・・

「令嬢は魔術を忌避されているようですね。」
先生の言葉にびっくりした。
そんなはずないのに、早く魔術を使えるようになりたいと思ってるのに。
「では、無意識なのでしょう。令嬢の心が魔術を使う事を嫌がり魔力を内へ内へと押し留めようとしているように見受けられます」

魔術を忌避。
やっぱり前世との関係ですよね。
無理やりこちらに呼び出され、閉じ込められ、殺された――――
すべて魔導師による魔術。
あちらの世界は魔術なんて存在しなかったから余計に未知なる力に恐れを抱いた。
それがトラウマとなって己の魔力を封じていると？

じゃあ、この気持ちを克服しないと魔術はつかえないってこと？
そんなぁ・・・心理学は苦手なのに。
・・・じゃなくて克服ってこの場合、どうすればいいんでしょうか？

見学する事は大事ですね

今日は久々に勉強はお休みです。
母様が月に一度行う治療奉仕に付き合うことになりました。

私が生まれる前は領地や近隣の村の住人を対象に『癒し』の力をつかい無償で治療を行っていたそうだ。
しかし生まれた娘が高熱で寝込むようになり、娘の看病に集中するため奉仕は暫く休んでいたそうなのだ。けれどアラート先生がやってきてからは寝込む事も無くなった為、１年前から月に一度伯爵家の近くに建てられた診療所で奉仕を再開しているのだ。
伯爵家領地には診療所がある。
これは母様が伯爵家に嫁ぐにあたって建てたものだそうだ。
今は医者が２人いて診療にあたっており重病人の場合は母様に連絡が行くようになっている。
伯爵家管理なので領民は基本的に無料、近隣の住人にも基本薬剤代くらいしか貰わないのでいつも診療所は患者でいっぱいなのだ。
アラート先生に言わせれば医療行為が無料なのは珍しい事なのだそうだ。
確かに先生の授業の中でも医者の数は少なくほとんどは王都近隣に集中していて、しかも高額の治療費がかかるとか。

「令嬢には夫人と同じ魔力がある筈ですので夫人の『癒し』の魔術を見るのはいい勉強になると思いますよ。己が対象なのと客観的に視るのとはまた違いますからね」
「はい、先生。しっかり勉強します。・・・ところで先生、この薬草の成分教えてください」
真面目ぶった生徒顔で答えた後、キラキラお目々でおねだりです。

もう5歳の令嬢ぶりっこはしませんが教えを請う時は別ですネ。
先生のツッコミもかるくスルーしております。
アラート先生は「またか」とため息交じりに面倒臭そうな顔をしながらも机の上の置かれた薬草を手に取り一つづつ成分を教えてくれます。こちらはスケッチした絵の横に成分を書き込んでいくのです。
先生の特殊魔力を聞いたときこれはもう利用しない手はないっ・・・と思いましたよ。
この力があれば薬草をもっと有効利用できるし、新しい薬効の草花も見つけられる。

いま領地にいる医者、タジル先生もちゃんと王都で医学の勉強した、良い先生なのだけれこちらの医療技術は少々心許ない。
ただでさえ薬だけが頼りのような医療行為なのに薬剤の種類も、知識もやっぱり足りないから患者さんの治療が長引いたり、悪化してしまったりする。
だから薬草辞典のようなものを作ろうと思った。
色々な効能の薬草がわかれば、組み合わせによって患者にあった薬を処方したりできる。
その為には医者が薬草について知らなければならない。
アラート先生の力はまさに渡りに船なのです・・・あれ？使い方が違うか？
せっかく数年はこちらに家庭教師として滞在されるのだからしっかりと利用・・・いや協力願わねば。

タジル先生も齢６０歳の貫録なのか5歳の令嬢の戯言と笑うことなく協力してくださっています。
おかげでかなりの薬草を採取出来て処方の幅も広がっているようです。

＊＊＊＊＊

母様の治療行為は基本的に重病人のみなのです。
医者の治療行為でも治らない病や怪我の患者を『癒し』ていきます。
その為人数もそれほど多くはありません。
母様達のような特殊魔力は普通の魔術と違って己の魔力のみを使用し術を行使するのだそうです。
ゆえに魔力の消費が激しい、魔術師にとって魔力は魂の源であり魔力の枯渇は魂の死を意味する。
その為に母様は月に1度病状によるがせいぜい4、5人の患者しか診る事が出来ない。
『癒し』の魔術師の殆どがそうらしい。

今日の患者は下半身不随の8歳の男の子、高熱が続き薬剤が聞かなかった女性、毒虫に両目をやられ視力を失った男性などさまざまだ。
母様は一人一人の症状を視て魔術を使う。
特殊魔力を持つ者はそれぞれ魔術の行使の仕方が違うのだそうだ。
母様の場合は歌を歌うことによって『癒し』が行われる。
魔力をつかって視れば母様の歌は光の粒になって患部を優しく包み込んでいます。

「母様の歌に魔力が宿って、患者さんの細胞を修復してゆくのですね」
「令嬢には視えますか？」
「え？金色の光の粒が視えますけど、先生には視えないんですか？」
「ええ、視る事は出来ません。多分同じ属性の魔力の持ち主だけが視る事が出来るのでしょうね」

そんな会話を先生としているうちに患者さんはみるみる回復していきます。
下半身不随や失明なんて現代医学でも治療困難なものを母様の魔術は治す事が出来るようです。

「『癒し』の魔力ってこんな病まで治せてしまうんですね」
自分達が今まで努力しても治せない病が『癒し』によって治ってゆく、その力の凄さに敬意と恐れが混じり体の震えが止まらない。思わず呟いてしまった私に苦笑しながらも先生は優しく頭を撫でてくれた。
「そうですね、必要以上に恐れる必要はありませんが魔術も万能ではありません、すべての病が治せるわけではないと思いますよ。しかし傍目には奇跡が起きたように見えます。だから貴族どもは『癒し』の魔術師を己の手の中に入れようと躍起になるのですよ。『癒し』の魔術師がこうして一般人の治療を行うなんて此処ぐらいでしょうね」

貴族嫌いな先生はいつも皮肉めいた笑みを浮かべる事が多いけど、今日はとても優しいお顔で微笑んでいました
母様のように魔力を使えるようになりたいとは思いますがやはり心の奥底は魔力を恐れているのかもしれませんね・・・・

視えるのも困りものです

母様の治療奉仕から1週間が経ちました。
今回治療にあたった患者さんの経過観察をタジル先生が行っていましたが完治したようです。

私は今診療所にて薬草辞典に勤しんでおります。
勉強の方はと言えば・・・

「令嬢はもう魔術学院の初等部で習うべきすべてを取得いたしましたのでもう特に勉学に問題は無いかと。ご希望とあれば中等部の基本学を進めますが」
「ちょっ～とまって！！先生っ？！まって！いまなんて？
この1年やたら勉強勉強で貴族は大変だなぁ、なんて思って頑張りましたが初等部の学問終了って・・・
確か魔術学院は7歳以上の魔力保有者を対象に初等部、中等部、高等部、と3年づつ、成績優秀者だけがその上の「院」に行くって聞きましたけど」
「おや、きちんと覚えておいでで、教えた者としてはうれしい限りですね」
「先生、私まだ5歳なんですけど・・・」
この1年を返してください・・・
魔力の事もあったから死ぬ気で頑張りました。ひそかに徹夜だってしたんですよ。
身長伸びなかったらどうしてくれるんですか・・・成長期の睡眠は大事なんですよ・・・
「それはそれは・・・令嬢があまりにも教え甲斐があったものですから、私も少々調子に乗って進めすぎてしまいましたね。申し訳ありません」

言葉では謝罪をしているけど先生の目は笑ってます。
コイツ絶対悪いと思ってないな。

「まあ、基本的な知識もありますし、『源』も視る事が出来るようになりました。あとはじっくりと魔術というものを理解して使えるようになるだけですよ」
「・・・それが一番難しいんですね」
「まだ、魔力判定まで2年もあります。焦らなくても大丈夫ですよ」

先生はそう言ってくれたけど魔力判定で魔力持ちと分かれば即魔術学院に入学させられるらしい。
なにせ魔術師は国にとって貴重な存在だ。
魔力があるなら魔術の基本学さえ習えば普通は魔術を使う事が出来るものらしい。
それが出来ないんじゃあ、いじめられる・・・絶対いじめにあうです（偏見）。
それだけは避けたいですよ。

とはいえ意気込んだところで急に魔術が使える事は無いので、「やれることからやろう」という事で薬草辞典の製作に尽力しております。
勿論、先生もこき使っ・・・ご協力頂いております。

そんな平和な日常なのですか・・・
この2，3日とても気になる事があるんです・・・
あたま・・・そう頭なんです・・・アンデリックさんのあたまがぁ・・・

アンデリックさんというのはもともと伯爵家で働く庭師さんなのです。
最近診療所でも薬草園を造り、使用する薬草を育てるようになりました。
今までは森の中に入って必要な薬草を採りに行くというのが一般的だった様なのですが危険な所に生息していたり、時期によって採れなかったりしたので、栽培可能な品種は育ててみようという事になりました。
そこでアンデリックさんに我が家の庭の手入れの傍ら診療所の薬草園の管理をお願いしたのです。
草木を愛し女性子供に優しい笑顔が爽やかな純朴好青年、２５歳独身！
麦わら帽子姿がとってもステキ！・・・・・・・取りさえしなければ。

礼儀正しい彼は例え仕事中であっても雇い主である伯爵家の人間が通れば帽子を脱ぎ丁寧に挨拶してくれる
伯爵令嬢である私にも・・・である。

ただ、彼の頭は残念なのです。
例えるならヨーロッパの僧侶のように頭のてっぺんだけが寂しいのです。
僧侶の場合は自分から進んで剃髪しその髪型なのでしょうが、彼の場合は不可抗力。
まあ、そういう人もいるよね・・・優しいいい人だからいいじゃない。
今まではそう思っていた彼の頭なんですが・・・最近変なのです。
彼の頭から金色いものが・・・いや髪の毛ではない・・・ハズ。

うすぼんやりと金色の線のようなものが何十本もうねっているのです。
意志を持つように、目なんかないはずなのにこちらに気づいてまるで助けを求めるようにこちらに向かってうねってきます。
イヤッ！！気持ちわるっ！！一体なんなんだぁ！あれは！！

今もアンデリックさんは診療所の窓の外、診療所の薬草園でお仕事中です。
あっ、目が合っていつものお辞儀をされました。
ああ・・・やっぱりまた見えます。

「先生！アンデリックさんの頭なんですけど・・・見えます？」

隣で薬草とにらめっこしていた先生を窓際まで引っ張りアンデリックさんを見てもらいます。

「ああ、彼の頭ですね・・・本人も気にしているかもしれませんのであまり凝視されては」
「いいえ、そうじゃなくって・・・金色もの見えませんか？なにかうねってませんか？」
「は？いいえ。とくには・・・」

ああっ・・・やっぱり先生にはッ見えないんだぁ～。
なに？アレ！！ミミズ？寄生虫？！
お化け？・・・よーかい？

「先生、私、へんなんです！」
「令嬢が変なのは存じてますが」

あっ、このヤロウまた本音が漏れてる。

「そうではなくって！変なものが見えるんです！アンデリックさんの頭に金色の線がうねうねと～！うー気持ち悪いぃー」
「・・・よくは分かりませんが、『癒し』の魔力の影響では？特殊魔力は個人によって魔術の行使の仕方から視え方までかなり違いますから」

残念な人でも見るような視線はやめてください先生。
・・・じゃあ、アレは私の『癒し』の魔力によるものなのか？
でもそうなるとアンデリックさんのアレって・・・病気・・っていうのか？
いや、でも治療で良くなる事もあるから・・・でも、そんなものまで対象なんでしょうか『癒し』の魔力って・・・
今度、母様に聞いてみなくては・・・です。

さっくりカミングアウトされました

夕食後、母様に早速『癒し』の事を尋ねてみる事にします。
ちょうど父様は先生と何やら話し合っているようですので今がチャンスです。
さすがに父様にまでアンデリックさんの事を話すのは宜しくないですよね。
場所も場所な事ですし、患者（？）の守秘義務がありますよね。

父様たちが話し合っているテーブルから少し離れた窓際で母様はソファに座り刺繍をしていました。
「母様、聞きたい事があるんですけど」
「あら、ユリアナ。なにかしら？」
母様は手を止め、刺繍道具をしまうと私の話を聞く態勢をつくってくれます。
母様は決して子供の話を片手間で聞かない、母親の鏡ですね。

「母様、最近、庭師のアンデリックさんの頭なんですけど・・・」
離れてるとはいえ、同じ室内に居るので父様に聞こえてしまうといけないので少し声をひそめて話し始めます。
「金色の線のようなモノがうねっているのが視えるんです。先生は『癒し』の魔力のせいだっていうんです。母様には視えますか？」
「アンデリックさん？今日もご挨拶していただいたけど・・・何も視えなかったと思うわ」
あぁ母様には視えていないようです。
母様の場合は患部（母様曰く、体の悪い処は青くくすんだ色に視えるのだそうだ。）
そこに向って”治れ治れ”と念じながら歌に魔力を乗せると患部へ魔力が沁み込んでいって『癒し』となるのだそうだ。

・・・・・え？医学知識なしですか・・・・・母様。

「ええ、私には診療所の先生のような医学知識は全くないの。だからタジル先生のような優秀な先生に基本的な治療を行っていただいて、先生が『癒し』が必要という患者さんを私が治していくのよ」

どうやら診療の主導権はタジル先生にあったようです。
母様は『癒し』の力の効く範囲なら重病人だろうが軽傷だろうが同じ魔力量で治してしまうらしい。
だからタジル先生が患者の選別をし母様の体に負担の無い範囲内で多くの患者を助けられるようにしているようです。
タジル先生・・・すごい人だったんですね。

勿論、母様でも治せない病気や怪我の人もいる。
その人々の患部はどす黒くなっていてもう母様の魔力は届かないんだそうだ
その事を話す母様の顔は少し悲しげだった。

じゃあ、アンデリックさんのアレは母様の中では病気じゃない認識なのですね。
でも、私には視える・・・・違いは何？
やっぱり医学知識の有無・・・なのかな。
アンデリックさんの年齢からすると確かにあの頭髪の寂しさは脱毛症の可能性もあるけど・・・
昔の知識をフル回転です。
魔力が使えないんじゃいつまでたっても挨拶のたびにアレを視なくてはならない。
それはヤダ。気持ち悪すぎる。

薬草で何とかならないでしょうか？
血行促進や代謝の促進が必要なはずだからセンブリやニンジンのエキスあたりか・・・

「まあ、ユリアナは薬草に詳しいのね。タジル先生が医学知識もすごいって仰ってたけど前世はお医者様だったの？」

考え事をいつの間にか呟いていたようです。
・・・ちょっとまって、いま母様変な事言いませんでしたか？

「あら？ちがうの？でもお医者様って事はもしかして私よりも年上だったのかしら・・・ふふふ、どうしましょう」
「母様・・・あの・・知ってる・・・の？」

言葉になりません。混乱しすぎて何を聞いていいのか、ーーーーーー母様が何を知っているのか。

「ユリアナの母親ですもの。貴女に前世の記憶が残っていて・・・多分、５０年前に起きたユーテリアス国の関係者じゃないかしら・・・という事くらいかしら」

うろたえた私の顔を見て母様が抱き上げ膝の上に座らせ抱きしめてくれます。
・・・ちょっぴり照れくさいですね。

「『癒し』の魔術師の間では時折ある話だって伝えられてるわ。幼い子供が自分の生まれる前の話をするって、でもそれは時が経つにつれ記憶は薄れ、普通の子と変わらなくなる。」
「・・・・私の記憶は薄れてきてない」

それどころか未だ鮮明に覚えている。
忘れる事なんて出来ない。

「きっとそれは今のユリアナにも大切な事だからなのよ。必要のない記憶なんかじゃない。とても大切なもの。ユリアナは隠しておきたいのかも知れないけど、今の生活の為に大切な記憶を押さえ込まないでほしいの」

「母様・・・」

母様はアラート先生から私が魔術を使うことを恐れている事を聞いて前世の事を父様や母様が知っている事を話そうと思ったらしい。
普通に暮らすのなら前世の記憶なんて有っても無くてもどちらでもいい。自分たちの可愛い娘には変わりは無いのだから。
でも記憶が辛いものなら話すことで心は少しでも軽くなるのではないか、悲しみや恐れは消えなくても記憶を共有する事で薄くする事も私たちにだって出来るはずだから・・・・と。

「私の自己満足なのかもしれないけどね」
そう微笑みながら母様は再び私を抱きしめてくれます。
私は俯いたまま顔をあげる事が出来ませんでした。
ひどく混乱して、心の中に恥ずかしさとやましさと嬉しさが入り混じっていた。

「ユリアナ、お前が誰であろうと私たちの娘には変わりは無いよ」
いつの間にか傍までやってきた父様に頭を撫でられ咄嗟に顔をあげてしまいました。
父様はいつもの変わらない笑顔で私に微笑んでくれます。

両親に促されるように私はポツリポツリと前世の話を始めました。
前世で小児科医をしていた事。
理不尽な召喚にあった事。
助けてくれた騎士、サイラス＝トルクスの事。
今は英雄王となった子供たちの事。
そして自分の最期の事。

母様はサイラスと由利の結婚の話になると「きゃあ、駆落ち婚ね！ステキ」とはしゃいでおりました。
そして何故か両親と共に興味心身に聞いているアラート先生、目が輝きすぎです。

ひとつづつあの時の起きた事を話す事によって自分の中でも何かが変わっていくようだった。
ユリアナという子供にとっては由利の記憶は強烈すぎるものなのだと思う。
幼い体は膨大な記憶と感情に拒否反応を起こし、記憶（こころ）は幼い体に戸惑いがあった。
いまこうして由利の人生を振り返る事によってようやく心と体に折り合いがつき始めているようだ。

私はいつの間にか涙を流しながら母様に抱きしめられていた。
泣く事は好きじゃない、おのれの無力さに嘆いたとしても何も変わらない。
涙を流すよりも自分の出来る事を迅速に行動する方がよっぽど建設的だ。

ーーーーーーずっとそう思っていたはずなのに。

「大丈夫よ」そう言われ、抱きしめられる事の安心感。
庇護を受けながらただ感情に任せて涙する事が出来る事が素直にうれしかった。

魔獣があらわれたそうです

一晩明けて気持ちの良い朝がやってきました。
雲ひとつない快晴です。小鳥もいつも通り元気に鳴いております。
ーーーーーー只今、絶賛自己嫌悪中であります。
昨晩の痴態を思い出すと、もう恥ずかしさでベットの上で身悶えする事しか出来ません。

「おはようユリアナ、もう起きてるかしら」
ノックと共に母様が部屋に入ってきます。
「ふふっ、恥ずかしがってるユリアナもかわいいけどそろそろ朝食にしましょう」
「〜〜〜〜〜〜」

母様には私の行動はバレバレのようです。
悪あがきは諦め着替えて朝食に行く事にしましょう。

＊＊＊＊＊＊

「そういえば昨夜は色々あって話しそびれたんだが、隣の領地に魔獣が現れたそうだよ」

朝食の最中に父様、さくっと爆弾発言です。
「隣の家で子豚が6匹うまれたよ」的な軽いノリで話さないでください。
スープ零しちゃったじゃないですか。

魔獣と言えば普通の武器では歯が立たない生き物なのですよ。
鍛えられた鋼を魔術で強化させ初めて魔獣に傷をつける事が出来るのです。
救いなのは魔獣はそれほど数が多いわけではなく、群れをなす事も人里に現れる事自体も少ないこと。

アラート先生の授業で新たに知った事ですが魔獣は生まれながら魔獣なのではなく獣等の死骸に『魔』が宿り魔獣となるのだそうだ。
だから魔獣の種類も色々、小さなネズミから牛等の大型動物も魔獣となりうるのだ。
ただの獣との違いは赤い瞳と体毛が黒い鋼のように硬くなること、そして強い魔力を有す事。
もとが骸のせいか多少の傷では死ぬ事がない、滅するには首を切断しなくてはならない。
凶暴ではあるが無闇に人を襲う事はしないが本能は獣と同じなのだ。
身に危険を感じれば人を襲う。
それに魔獣は魔術師の魔力を欲するそうで潜在魔力のある子供などが襲われやすいのだ。
『魔』に関してはいまだ分からない事が多い。
視た事があるものは黒い靄のようなものだという、魔力のあるものにしか視えず魔導師の描く陣によって生み出される。
『魔』自体が強い魔力の塊ではあるが生きた獣に『魔』が宿る事は無い。
昔、生きた人間に『魔』を宿させようと試みた魔導師がいたらしいが実験体となった者は『魔』にのまれ、精神を破壊され、もはや心身ともに人と呼べないモノとなってしまったそうだ。

「２０年前に開(ひら)かずの森から漏れ出た『魔』によって生み出された

生き残りのようだよ」
「父様、２０年前何かあったのですか？」
「ああ、詳しい事はよくわからないがユーテリアス国にある開かずの森の封印が弛んだようなんだよ。それに乗じてかなりの量の『魔』が漏れ出たらしいんだ。でも殆どの『魔』も魔獣もユーテリアス国の騎士たちが捕縛したって聞いていたんだが」
「開かずの森ってもしかして・・・」
「ええ、令嬢の前世に所縁のある場所です。消えなかった陣を何重もの森の封印によって人も獣も入れないようになっているので、開いてはいけない、開く事が出来ない『開かずの森』と呼ばれています」
私の呟きに朝食を共にしていたアラート先生が説明してくれます。
「それで今日、アラート先生と共にクディル男爵の処に行ってくるよ。いやあ、こんな時に魔術師が近くにいてくれて助かったよ。魔獣の捕縛に魔術師は不可欠だからね」
父様は笑顔でそんなこと言ってますがアラート先生はいかにも面倒臭そうなお顔ですネ。
業務外の仕事だと思いっきりため息ついてますが、父様は気にしていないようです。
我が家では使えるものなら例え何者であろうと使え精神ですから、こき使われるのは諦めてください先生。
隣の領地、クディル男爵家の領地なのだがご領主は確か王都に住んでいて隠居された老男爵が領地を切り盛りしていると聞いている。

「クディル男爵はご高齢だからね、魔獣の対応は体力的にお辛いだろから手助けできる事があるだろう。王都のご子息の元にも連絡はいったと思うが時間がかかるだろうから」

父様と先生は領民の若者たちで組織した自警団に、伯爵領(こちら)にもし魔獣が現れる事があった場合の対処方法や連絡方法を伝えクディル男爵家へと行ってしまわれました。

たった２人で騎乗し出かけるそうですが、片道２０分程の距離とはいえ途中で魔獣に出くわしてしまわないか少し心配です。

魔獣対策は怠りなく

父様達が出かけられてから母様は自警団の人達と対魔獣用の武器を製作中です。
自警団といっても元々は農民なので武器には縁のない人々ばかりです。
昔は国の周りの情勢も安定してなかったから国民も二男、三男が徴兵されていたが今は平和的な国交が開かれ国の兵士は徴兵制から志願制になったそうだ。
王都や国境付近に兵士が配備されるのみで各領地はそれぞれの方法で領地内の統治を行うことになっている。
伯爵領(ウチ)では各村から志願してきた若者に自警団を組織させ、各村の警邏や緊急時の招集、行動を自警団の判断で行える権限が与えられている。
といっても辺境にある田舎の領地なので極悪犯罪者が来る事は無く、殆どが警邏の途中、足の悪いおばあちゃんの代わりにお買いものや壊れた窓の修理をしている彼らをよく見かける。
森が近くあるので家畜を狙ったオオカミや時折お腹をすかせたクマが現れる事があるらしいが退治するのも彼らの仕事である。
のんびり気質の村々のせいか若者たちも気の良い者が多い・・・うん、いいことだよね。

武器を使う事もそういった獣相手が多いので自警団の常備武器は剣ではなく弓矢と身長と同じくらいの長さの棒を携帯している。
獣の動作は素早いから、なれない刃物を振り回すよりは安全な位置から狙える弓や長めの棒で威嚇した方が森へ追い返せる確率は高い。
棒術に関しては父様が自警団の若者たちを訓練しているからかなり腕の立つ者もいるくらいだ。

今回も鋼で鍛えた矢じりに母様が魔術で強化を行っていく。
母様は周りに集められた『源』をひとつづつ丁寧に組み合わせ強化の魔術を作り上げる。
母様の手元に造られた文字や数字のソレはまるでレース編みのように規則正しく編み込まれ矢じりの中へ溶け込んでゆくのが視える。
私も母様の協力をしたかったけど・・・・やはりさわる事も出来ませんでした・・・くすん。

子供の私では他に出来る事も無いので母様の横で大人しくしている事しか出来ません。
でも、ちょっと気になる事があるんですよね。

「母様、魔獣は魔術師を襲うって聞きました。それなら母様やアラート先生がいるこちらに現れるんじゃないんでしょうか？それともクディル男爵領にも魔術師がいらっしゃるんですか？」
「ええ、正確には魔術師ではなく魔術師候補の子なの。レニー君って言って今年６歳なのだけど魔力が放出してしまっているの」

母様の話ではレニー君は数ヶ月前から突然大量の魔力が現れだしたのだそうだ。
魔力の発現は６歳ころから少量ずつ現れるのが普通なのだそうだ。
７歳の時点でも魔術を行使できるほどの魔力はまだ現れず体内に魔力があると判定機によってわかる程度。
私の場合もかなり特殊だったらしいが母様の判断のおかげで体に対する負担は少なかったそうだ。
母様に感謝です。
でもレニー君の周りには魔術師の血統は無く、いきなり現れた魔力にレニー君自身もどうすればいいかわからなかったようだ、制御できない魔力は次々と『源』を集めだし滅茶苦茶な『構築』そして暴発してしまったらしい

家の屋根が吹っ飛んでしまったそうだからかなりの力があるのだろう。

そんな未知なる力に両親は息子を恐れた。
こんな片田舎の村に住んでいては魔術師に出会う事なんてまずない。
隣領地の母様も魔術師ではあるが『癒し』の魔術の為かあまり魔術師として見られていない部分がある。
それに潜在魔力を持つ子供は7歳に国民全員に行われる魔力判定により王都に集められるから例え暴発を起こす子がいてもそれは学院内での事となる。
嵐をおこし屋根を吹っ飛ばす子供を魔術師を知らない両親が恐れるのも仕方ない事なのかもしれない。

両親は息子が呪われていると老男爵に訴えてきたそうだ。
老男爵はレニー君に魔力があり暴発している事を説明したが両親は信じない。老男爵自身も魔力がある訳ではないので確信を持って説明できないのが要因だったという。
そこで老男爵は父様に相談に来たそうだ。
母様が魔術師である事とアラート先生が私の家庭教師として伯爵領に居る事を知ったからだそうだ。

父様方で相談した結果、アラート先生と父様がレニー君に会いに行く事になった。
アラート先生は両親の前でレニー君が暴発したものと同じ魔術を使って見せ、レニー君が魔力保持者であり7歳になったら王都の魔術学院に入学しなくてはならない旨をつたえたそうだ。

しかし入学までにはまだ間があり、このままではまた暴発しかねないというのでレニー君は男爵家で預かりアラート先生が魔力の暴発を抑えるための教育を行うことになったらしい。

そうか、それで最近先生が行方不明になる事が多かったのですね。
てっきり薬草辞典の面倒臭ささに逃げてるのかと思ったのですが仕事だったんですねぇ。
私にも教えてくれればよかったのにぃ。
レニー君に会ってみたいですよ。

不満タラタラに母様に訴えてみれば。

「ユリアナは魔術を恐れている節があるから彼の魔術を視て余計に恐れを増長させてしまってはいけないからってアラート先生のご配慮だったのよ」

恐れを増長させる程の魔術って・・・・どんだけ凄いんですか？
やっぱり1度会ってみたいですね。

助けたい命

母様が魔術を込めた矢をそろえながら「そろそろ父様達は到着したかしら」などと話していましたがなにやら外が騒がしくなってきました
なにかあったんでしょうか？
まさかこちらに魔獣が来た・・・とか？

心配になって外の様子を見に行こうとしたら突然目の前のドアが開きサイザンさんが駆け込んできました
いった～い！地味にドアに鼻をぶつけました。鼻が低くなったらどうしてくれるんです

「おっ、お嬢！すまん、そんなところに立ってたのか」

鼻を押さえる私に気づいたサイザンさんがあわてて謝ってきました
まあ、いいです。でもノックぐらいはしましょうよ

あ、サイザンさんは自警団の団長をしている方です
唯一の王都出身者で、王都騎士団出身者なのです
昔、父様の部下（父様が騎士団出身なのも驚きですが貴族の子息は騎士団に入団する事が多いのだそうだ）をしていて父様が領地に引っ込む時についてきたらしい
もともと田舎暮らしに憧れていたらしくって嬉々として畑仕事をしている処をよく見かける

「伯爵夫人、伯爵より火急の手紙がまいりました。急ぎ披見願います」

サイザンさんは母様に駆け寄ると片膝をつき、手紙を掲げ差し出す
さすが騎士団出身者だけあって動作は洗練されている
普段は人の事を「お嬢」とよんでは身分の事など気にしない大雑把な人ですが自警団の皆には信頼されて人気がある

「まあ、大変。急いで男爵家に行かなくては。サイザン様、男爵家に魔獣が現れ怪我人が出ました。魔獣は旦那さまとアラート先生により捕縛されましたが怪我人はかなり危険な状態なようです。私が今からまいりますので馬の用意と護衛をお願いできますか」

伝書鳥(でんしょどり)を飛ばし届けられた手紙を読むと母様はあわててサイザンに男爵家へ向かう旨を伝え騎乗には邪魔になるドレスを着替える為メイドを呼び部屋を出て行ってしまわれました
母様のあわてようからすると患者はかなり危険な状態にあるようです
サイザンさんも母様と自分の騎乗する馬を用意するために厩へ向かって行きました

私もこのままじっとはしていられません
急いで診療所に向いタジル先生から増血効果のある薬草や鎮痛作用、麻酔作用のある薬草を分けてもらいます
魔獣相手での怪我人なら出血している可能性があるのできっと必要となる筈です
母様が『癒し』の魔術を使うにしても経過で必要となる場合もあるのです

「母様、私も連れて行ってください」
薬草鞄を下げて母様の元に直談判です

「お嬢、遊びに行くんじゃないだぞ。向こうはどんな状態かわから

ないんだ。子供がついて来る処じゃない」
サイザンさんが窘めますが此処は聞き入れられません。どれだけの怪我人が出てるか分かりませんが母様だけでは対処できないかもしれないじゃないですか
タジル先生は診療所があるので連れてはいけないんですから自分が行くしかないです
じっとなんてしてられません

「サイザン様、この子を貴方の馬に乗せてもらえますか」
「しかし・・・」
「この子はきっと皆さんのお役に立てますわ」

母様は微笑みながらもきっぱりと言い切り、私をサイザンさんの方へ促します
サイザンさんは盛大にため息をつきながらも主の命令に従い私を連れて行ってくれるようです

連れて行ってくれるのは嬉しいんですが、首根っこを捕まえて馬に乗せるのはやめてくれませんか
私、猫の子じゃないんですから、洋服で首がしまってくるしいです・・・

＊＊＊＊＊

男爵家では野戦病院さながらの騒ぎになっていました
父様達が到着する前に魔獣は現れたのだそうだ
大型犬の魔獣だったそうだ。男爵家では魔獣の対策が間に合わず村人の数人と男爵家の使用人の多くが怪我を負った。
そして－－－－－

「やはり魔獣はレニーを狙ってきました。あの子の魔力に引き寄せられたのでしょう」

私たちを出迎えてくれた老男爵は少し疲れた表情でレニー君がいる部屋に案内してくれます
老男爵の話ではレニー君はかなりの深手を負っているようです

連れられた部屋は入った瞬間に何やら重苦しい空気を感じました
ベットで眠る男の子、きっとあの子がレニー君なのでしょう
ベットの脇にはアラート先生が、そして少し離れたところに中年の男女がひと組・・・脅えた表情で立っていました

母様はすぐにベット脇まで行くとレニー君の症状を視ます

「・・・・ごめんなさい。私の力では・・・・もう」

力なく首を横に振る母様の横に付き私もレニー君の状態を見ました
レニー君は助かる状態ではありませんでした
右わき腹を魔獣に噛みちぎられたのでしょう、肉がえぐれ内臓の損傷も見られます
かなりの出血もあり、いまだに息がある事の方が不思議な状態です

「もういいのです！これがこの子の運命だったんです！やはりこの子は天に還る運命だったんです！」

部屋の隅で脅えていた男性が声を上げます
きっとレニー君の両親なのですね

「あんな力をもって・・・きっと生きるべき命ではなかったのです」

レニー君の両親は魔術を恐れたという、未知なる力を持つ息子を恐れていた
だからって・・・生きてはならない命なんてない

ベットで眠るレニー君の息は荒く、出血の為か顔は真っ白だった
覗き込むように見つめる私に気づいたかのようにレニー君は微かにその瞳を開けた

『イキタイ・・・シニタクナイ』

彼の青い瞳と視線が交わる時、頭に響く声が聞こえた気がした
レニー君の声だったのかもしれない
まだたった6年・・・生命を受けてそれだけしか生きていないのに
こんな形で何故死ななければならないなんて

『タスケテ・・・シニタクナイ』

助けたい・・・このまま死なせたくない
体中に巡る己の魔力が心に反応しているのが分かる
助けられる？助けるチカラがほしい・・・もう昔のような思いはしたくない
ーーーーー助けたい

「ーーーースキャンーーーーー皮膚、真皮裂傷ーーーー小腸破損ーーー」

レニー君の患部が手に取るように視えてくる・・・自分の魔力が両手に溢れ出てくる
母様と同じ金色の光。不思議な事なのだけどいまならこの力の使い方が分かるような気がする

「ーーーー止血ーーーー細胞活性ーーーーー損傷部修復ーーーー」

患部に手を当て患部付近の血流を一時凍結させ、魔力を込め細胞を活性化し急速な細胞分裂を繰り返させ欠損した小腸を再び作り上げる

「血管及び神経修復ーーーー破損部復元ーーー真皮、皮膚修復」

ちぎれた血管、神経を慎重に修復、元の位置に繋げてゆく
内臓の時と同じように皮膚を作り上げ、見た目は元通りに戻っていった
一時止めていた血流を元通りに戻す・・・修復した血管からの出血は無いようだ
レニー君の顔に赤みが戻っていった。うん、呼吸も先程より良くなって、脈もほぼ正常・・・

「先生、レニー君はかなり出血しています。増血までは出来そうにないので持ってきた薬草を・・・」

隣にいたアラート先生にそうお願いした事までは覚えているのですがどうやらその直後、気を失い倒れてしまったようです

目が覚めて、現れたのは・・・でした

気付くと私は自室のベットの上でした。
母様と父様に心配そうに見つめられながらの目覚めにちょっぴり恥ずかしいですね。

「ユリアナ、大丈夫かい？丸一日眠った状態だったから心配したよ」
「魔力を使いすぎたのでしょうね。もう少し眠る？それともお腹がすいてるかしら？」

『ぐぅぅぅ～～～～』
父様、母様の言葉に急に空腹を訴えてくる自分のお腹に脱帽です。
そうか、丸1日も眠っていたのですね。
母様について男爵家に向い、レニー君を・・・

「母様！レニー君はどうなりました？」

多分、体の治療は出来ていたと思う。でも、どこかほかに不具合があったりとか・・・

「大丈夫よ、レニー君は意識を回復したわ。まだ、ベットで安静状態だけど危険な状態からは脱したとタジル先生がおっしゃってたから」

あの後、私達と入れ替わりにタジル先生が男爵家まで赴き、診療を行ってくれたそうです。
レニー君が回復するまで、タジル先生が男爵家に往診に行く事が父様達との間で決まったようです。

「じゃあ、お食事を持って来るわね」
「母様、大丈夫です。もう起き上がれるので食堂で食べます」
食事を持ってこようとする母様を止め、ベットから下ります。
別に病気というわけじゃないのにベットの上で食事はあまりしたくないですね。

「そう？じゃあ、お洋服を着替えて下りてらっしゃい。」
「はい」

眠っている間に、母様が寝間着に着換えさせてくれていたので普段の洋服に着替えましょうか。
クローゼットから普段着ている洋服を取り出し、寝間着を脱ごうとしたんですが・・・
あれ？胸元に何か黒ずんだ汚れが？
ーーーーー違う。
何かの文字・・・ううん、文様・・・
ーーーーー違う。
私はコレを知っている。
嫌な汗が背中を伝う。自分の動悸に耳がおかしくなりそうだ。
寝間着を脱ぎ捨て、姿見の前に体を向けるが思うように体が動かない。
ミタクナイ・・・見なければ・・・
姿見に映し出された私（ユリアナ）の胸には一由利の命を奪った“陣”が描かれていた。

「いやーーーーーーーーっっ」
なんで？なんでこんなものが！！
足に力が入らず、崩れるように座り込んでしまった。

「どうしたんだ！ユリアナ！！」
ドアを蹴り破りそうな勢いで父様が入ってくるのが見えた。
ちょっと待って！今私、はだ・・・

「ぎゃあぁぁぁ！！父様のえっちぃ！！」

思わず手元にあった櫛を父様めがけ投げつけてしまいました。
櫛は回転しながらも見事に父様のお顔にクリーンヒット、父様は娘からの思わぬ攻撃によける事も出来ずに床に倒れ伏されました。
どうやら、気絶してしまったようです。

ああぁぁぁ、しまった！！
5歳児の娘の裸見たぐらいでこんな事される父親なんていないよな・・・ごめんなさい父様。

「あらあら、どうしたの」

騒ぎを聞きつけ母様が様子を見に来てくれましたが、部屋の入り口で倒れる父様にびっくりしているようです。

「は、母様〜〜〜〜」

恐ろしさと混乱の中私は母様に飛びつき、胸元に現れた“陣”の事を説明しました。
直径5？程の“陣”。
胸元・・・というよりは丁度心臓のあたりにあるようで・・・ゾッとする。
なぜ、こんなものが今になって、ユリアナの体に現れるの？

《見つけた――――》

え？空耳？

《ようやく、戻ってきた――――》

事が起こったのは一瞬だった。
私の周りに突然風が吹き荒れ、視た事も無い数式や記号で構築された術が現れた。
構築の中から何か赤いモノが現れたのは視えた。

――――が、次の瞬間、ものすごい勢いで抱きしめられました。
ちょっと待て！！苦しい！もの凄い力でぎゅうぎゅう羽交い絞めにされ息も絶え絶え状態です。
目の前に揺れる赤いモノ・・・ああ、髪の毛だったんだぁ・・・なんて、イッてる場合じゃないです！
どうにかしなければ、生命の危機です！

「はっ・・・はなせっ」

唯一自由になっている両足をバタつかせながら、それだけを告げるとようやく戒めは緩んでくれた。

「会いたかったよ。ユリ」

ようやく見る事の出来た顔は懐かしいサイラスの顔によく似ていた。
――――サイラスによく似ている・・・・でも、彼じゃない・・・・・
誰？

・・・でも・・・でも・・・それよりも・・・この人なんで血だら

けなの～～～～っ！！
先程、視線の端に捕えたのは髪だけではなくて、この傷だらけの肌に流れる血だったわけだ。
早く手当て・・・ちょっと待て、それより私、まだ服着てないんじゃ・・・・

「みんな出て行け～～～～～！！」

まずは洋服を着る事が先決なようです！

目が覚めて、現れたのは・・・でした（後書き）

・・・ようやく、息子登場です。

再会した息子はいろいろ最強なようです

皆を廊下へ追い出した後、急ぎ洋服を着こみ居間へ下りて行きます。

「おかしいわ。『癒し』が効かない。」

「御夫人殿、申し訳ありませんが私に魔術は効かないのです。傷薬と包帯は持参しておりますのでこちらでお願いできますか」

彼は腰に下げた革袋を母様に差し出す、その中には大量の傷薬と包帯が入っていた。

彼の体についた無数の切り傷からは今だ出血が続いていて止まる事がないようだった。

私は居間の入り口から中へ入ることはせず、母様に包帯を巻かれる彼を見ていた。

見た目、２０代半ばってところか、赤い髪に鳶色の瞳。

彼はサイラスではない・・・でも似ている、他の人。

同じ髪質、同じ瞳の色。・・・もう一人知っている。

ーーーーーでも、あれから５０年経った。こんなに若くは無いはず。

「ユリ！」

入り口に立つ私に気付いた彼は満面の笑顔でこちらに向ってきた。

ああ、この光景にとても覚えがある。

遠い昔、あの子もあんな笑顔で駆け寄ってきた。

「ガーディ・・・」

「やっぱり、ユリだ。やっと戻ってきた」

再びぎゅっーと抱きしめられまたもや窒息しそうになりました。・・

・こら！苦しいから放しなさい。
力いっぱい抱きついて来るのは昔と変わらないなぁ・・・立場が逆なようですが・・・

ああ、いかん。頭が混乱しすぎて現実逃避しているようです。
ガーディである事は間違いないようなんだけど・・・
何故、こんなに若いのでしょう？
何故、当然現れたのでしょう？
何故、私が転生した事を知ってるんでしょう？
分からない事がいっぱいです。

「ガーディ・・・なんだよね。どうやってここに来たの？どうしてそんなに若いの？どうして私の事知ってるの？ライナスやレイティは元気なの？それから――――」
「ユリ、そんな事よりもまず重大な事があるよ。」
「重大な事？」
何があったのだろうか？重大って・・・・

「僕らの結婚式はいつにしよう？」

――――――――――は？
アレ？今何か幻聴が・・・・

「俺としてはなるべく早く嫁に迎えたいんだけど、まずはユリの今世のご両親に挨拶して色々整えなきゃならないか。ユリってば貴族の御令嬢のようだから準備とかも必要だろうし」
「ちょっとまって！ガーディ！！・・・なんであんたと結婚？・・・・え？重大って・・・それ？」
「勿論。ようやくユリが帰って来たんだから」

結婚って、アンタ。笑顔でサラッと何を言ってるんでしょうね。ユリアナはまだ5歳・・・いやいやいや、そういう事じゃない。
なんで、ガーディと結婚しないといけないワケ？
そう尋ねてみるとガーディの顔はみるみる悲しげな表情になっていきました。
ちょっと！そんなへこんだ顔されるとこちらが悪い事してるみたいじゃないですか。私は正論を言ってるだけです！

「はぁ、そうか、ユリは一度死んでるから忘れてしまったのかも知れないよな。・・・それとも、年のせいでの物忘れとか？」

溜息をつきながら、ヤレヤレ困ったもんだとばかりに説明しようとするガーディだが、最後の一言は聞き捨てならないですよ、物忘れする年じゃないです～。

＊＊＊ガーディによる回想＊＊＊

場所はユリの終焉の地となるカンズ村。
時はサイラスとユリの結婚式。

「ユリ、父さんとなんか結婚せずに俺と結婚しよう！」
花嫁姿のユリにすがりつく幼いガーディ。
「ガーディ、嬉しいけど貴方はまだ子供だもの。結婚は出来ないわ。私はサイラスと結婚するの、貴方のお母さんになるのよ」
困った声で体をクネクネさせるユリ、立ったままのサイラス。
「じゃあ、俺が大人になったら父さんと別れて俺のお嫁さんになってよ」
「まあ、ガーディ嬉しいわ。早く大人になってね」
ひしっと抱き合うガーディとユリ。

＊＊＊めでたしめでたし＊＊＊

って、なんですかっ！この回想は！
というか、何？この指人形劇！舞台装置に、指人形はどこから出した？！
つくり声の台詞回しとか妙に上手な劇になってたけど練習したのか？！お前！！
それに、この指人形・・・・布製なのだけど顔の造形が妙にリアル・・・昔の自分の顔によく似てて・・・コワイ・・・
一体誰が造ったんだ？・・・・まさか、ガーディじゃないよ・・・ね。

しかし、このヘンテコ劇のおかげで思い出しましたよ。
結婚式当日にああやって告白されたのは本当。
でも、返事は「なぁ～に冗談言ってんの」ってデコピンして終わりだったはず。
ただ、結婚をやめさせたかっただけのようだったし。
その後も、普通に接してくれてたし、私も必死で母親になろうと頑張ってた。

こんなヘンテコ劇のような雰囲気はなかった・・・・ハズだ。
ガーディも少なくとも、嬉々としながら人形劇をするような子ではなかった・・・

ーーーーーガーディアル＝トルクス、この５０年でお前の身に一体何があった・・・の？

魔術はやはり恐ろしいようです

「まあ、とっても面白い人形劇だったわぁ。ユリアナってばドラマチックな人生送ってたのね」

私と共にガーディの寸劇を見ていた母様のセリフに脱力です。

・・・・おもしろかったですかぁ？

いやいや、当事者でなければこれはこれでいいのか？

まあ、結婚云々はとりあえず置いておいて（アラート先生との授業で身に付けたスルースキル発揮です！）、それよりも、ガーディの腕・・また血が滲んできているようです。

出血が止まらないのでしょうか・・・

「ガーディ、腕見せて、また血が滲んできてる」

「ああ、これくらい大丈夫だよ。俺の体、特殊だから、魔術効かないし、この出血も3日すれば止まるから其の侭ほっとけばいいよ」

3日も出血が止まらないって、どんな体じゃ～～～～！！

しかも、何故そんなにケロッとしてるの？

慣れ？慣れって何ですか～！そんなのに慣れちゃ駄目デショ！！

とりあえず傷口を見せてもらいましょう。

さあ、服を脱ぎなさい！

ああ、こういう時子供の体は不便です、手は届きにくいし力も無いから脱がせにくいったらないですよ。

あれ？なんか生温かい視線を感じます・・・

・・・母様、なんなんですかその目は。

「ユリ、積極的なのは嬉しいけど御両親の前でそれはちょっと令嬢としてはまずいんじゃないか」

はい？そんな頬染めて微笑まれても何のことか…

只今の我々の恰好は胡坐を組んで座る青年のシャツを向かい合って立ち、必死で引き剥がそうと抱きつく幼女の図・・・・である。

いや！別に抱きついたんではなくてですねぇ！服を脱がそうと・・・

あれ？それもアウトですか？

「いいから！服を脱ぎなさい～～～！！」

いつの間にやら腰にまわされた手を叩き落としながら叫べば、ガーディは渋々ながら上着を脱ぎ始めました。

初めから素直に脱げばこんな手間は無かったんですよ。

上半身にまかれた包帯からは所々血が滲み、白い布を赤く染め上げていた。

かなりひどい怪我のようなのにガーディは平気そうに飄々としている。

包帯が巻かれているガーディの体は無駄な肉の無い鍛えられた体で、思わず見惚れてしまった。

当たり前だけど、子供の頃の体とは全く違っているものだから不思議。

傷口に注意しながら、丁寧に包帯を外していきます。

両腕全体と肩、胸に腹、本当に全身包帯だらけなんですね。

包帯の下から現れたのは無数の切り傷、傷口の大きいモノから小さ

いモノまでそのどれもが深く切られていて血が滲み出ています
肩の包帯を外そうとした時、ガーディの体がわずかに揺れた。
アレ？痛かったですか？
包帯の下から現れたのは傷ではなく・・・・“陣”だった。
私の胸に刻み込まれているモノと同じ大きさ、文様の“陣”。
ガーディの両肩、それに前を向いているので気付かなかったけど背中にも同じものがある。

「ガーディ・・・これ」

自分でも声が震えているのが分かります。
何故、ガーディの体にもこの“陣”があるの？

「あの時の“陣”だよ。俺たちにとっての力であり、ーーーー呪い」
「のろい・・・って」

向けられた瞳は酷く沈み、私はそれ以上問いかける事が出来ませんでした。
ーーーー違いますね、私が聞く事を拒んだのです。
聞く事が怖くて、ガーディが何か言う前に話を逸らしました。

「とりあえず、その傷を何とかしよう」

母様は『癒し』が効かないと言っていたけど、私の『癒し』はガーディには効く気がしている。
不思議と確信があった。
心を落ち着け、己の魔力に集中する

「両上腕及び前腕、側腹、両大腿及び下腿ーーーーー縫合」

私の手から金色の光の糸が現れ傷口を縫いあげていく。
糸で縫う行為ではあるけど魔力で縒った糸である為、ガーディに痛みは無いようだ、見る見る縫いあがってゆく傷口を興味深そうに覗き込んでいる。
縫合の終わった金の糸は皮膚に溶け込むように拡がり消えていった。
すべての縫合が終わると皮膚は傷一つない状態になった。

「凄いな、やっぱりユリの魔術は効くんだ」

綺麗になった腕を見ながら小さく呟き、クスリと笑った。

「ありがとう、ユリ」
「べっ・・・別に大したことじゃないから。それより、なんでそんなに傷だらけだった訳？」

あらたまってガーディにお礼を言われて焦ってしまいましたよ。
その笑みに少しだけドキッッとしたのは内緒です。

「ああ、漸くユリの気配を感じ取れたから、早く会いたくって時空魔術を使った」
「時空魔術・・・？」

そんな魔術あったっけ？魔術に関してはかなりアラート先生に詰め込まれたから色々知っていると自負してるつもりですが聞いた事ありません。

「一般的な魔術じゃないよ。多分使えるのは俺だけ」

私の疑問に気付いたのかガーディが説明してくれます。

５０年前に得た力、（建国記に書いてあった力ですね）によって使えるようになった魔術だそうだ。

「ただ、この魔術は不安定な時空間の中を通るから、歪みに生じて出来た真空の刃に切り刻まれてしまうんだよなぁ。今までは物体を何度か送った事あるけどボロボロになっちゃって・・・自分を送るのは初めてだったけど上手くいって良かったよ」

良くないです～～～！！
そんな危険な魔術使わないでくださいっ！！
下手したら命の危機です！
尋ねてくるのなら地道に馬車で来てください！

まずは自己紹介でしょうか

久しぶりの再会なのだから、お茶でも飲みながらお話をしてはどう？という母様の提案によりお茶会中なのですが・・・なのですが・・・私はどうしてここに座ってるんでしょうか？
母様がお茶の用意をする為にキッチンに向った時は確かにソファに腰を下ろしたはずなのに・・・
ガーディによって「この方が話しやすい」と膝の上に乗せられてしまいました。

いや！この方がどう考えても話しにくいでしょう！

「おろして～～！！」

と、足掻けば、余計に羽交い絞めにされてしまいましたよ。

「あら。仲良しね」

お茶の用意を手に戻ってきた母様ですが助ける気は無いようです。
もうこの状態なのは諦め、お茶にするしかないようですね。膝にお茶でも零してやろうかしら。

「え～と、改めて自己紹介しないとね。今は、アルシャン国伯爵クラウス＝フィールゼンとリステリア＝フィールゼンの娘、ユリアナ＝フィールゼン。５歳になりました。」

もしかすると、ガーディは知ってるかもしれないけど、一応ね。
しかし、ガーディの膝の上に横向きに座らされているのだけど、それでも少し見上げる形でしか話せないので首が辛いです。

「そうか、ユリアナって名前なんだ。なんだか不思議なものだよな。見上げていたはずのユリがこうして腕の中に入ってしまう位に小さくて、俺よりも年下なんて」
「私も不思議。あの、やんちゃだったガーディがこんな立派な青年になってるんだもん。・・・というか５０年だよねっ？！５０年は経ってるハズよね？！なんで青年なの？！なんでそんなに若いわけ？秘訣は何？アンチエージング？！いやっ、それにしては効きすぎてる。情報操作なのか？あれから実は１０年しかたっていませんでした。とかそういう事なのかっ？！」

ああ、いけない、興奮してしまいました。
だって、こんなに若いのはおかしいでしょ。
・・・いえ、一つだけ要因となる事を私は視た・・・のだと思う。
・・・それでも、そうであって欲しくないから・・・言葉は別の事ばかりついて出てしまう。

「心配しなくても５０年は経ってるよ。賢いライナスのおかげで漸くユーテリアス国も落ち着いきたしね。俺が若く見えるのは、う～ん、ユリはあんまり聞きたくないと思うけど・・・これも“陣”の力によるものだよ」

ーーーーーやはり、のようです。
私の表情に気付いてか、ガーディは少し困った顔をしながら。
「ユリにも関係してくるから、詳しく話さないといけないんだけど・・・」

ドドドドドドドッーーーーーーー

なんですか?!今の音、何かが階段を転げ落ちてきたような。
と思ったら、居間のドアが勢いよく開かれ父様が雪崩れ込んできました。
父様、今まで2階の廊下で気絶したままだったのですね・・・ごめんなさい。

「ユリアナ!!違うんだよ!父様はただ心配で心配で〜〜〜〜!」

一直線にこちらに向ってきます。

「決して覗こうとしたのではなくて――――――――どちら様?」

私達の間近に来てようやく父様はガーディの存在に気付いたうようです。
みるみる父様のお顔が険しくなっていきます。ああぁ、娘が見ず知らずの男の膝に座っていたら父親は心中穏やかではないですよね。

「はじめまして、義父上殿。私はガーディ=トルクスと申します。ユリアナ嬢と結婚の許しを賜りたく、ユーテリアスより参りました」

私を膝から降ろすと立ち上がり右手を胸に添え、腰を折り、父様に向かい挨拶をします。
ちょ〜と待て!ガーディ!
いきなりソレですか?まだソレって継続中だったの?

「けっ・・・・けっけっけっ・・・けけっけこん!」

父様、『け』が多いです。

「ええ、出来れば、ユーテリアス国に連れて行きたいと・・・」
「駄目だ！他国へ嫁ぐなんてとんでもない！許さんぞ！ユリアナは何処にもやらん！！」

いや・・・まだ求婚を受けてませんから！
それにまだ5歳で結婚も何もないでしょう・・・いや、貴族社会では5歳くらいで結婚決める事があるのか？

「とにかく、娘が欲しければ私を倒してからにしてもらおう！」

父様！落ち着いてください！
いつの間に帯剣なさってたんですか？！
家の中で剣を抜こうとするのは止めてください！
ーーーーーあ、父様が固まりました。
母様の魔術の縄が父様を縛り付けているようです。

「まあまあ、旦那さま。結婚とは当人同士が決めるもの。周りがとやかく言うのは褒められた事ではありませんわ」

笑顔で父様の体をぐいぐい締め上げておりますが、その縄の構築って・・・鋼ですよね。
変形させてかなりしなるようになってるようですがそんな物で父様を縛り付けてよろしいんですか？

「ユリアナ、ここでは落ちついてお話が出来ないようだから。ガーディアル様を客間に御案内して頂戴。お泊り出来るように整えてありますから、二人で今後の事はお部屋でゆっくり話し合うといいわ」

まさに聖母の頬笑みで私達を2階へと促しますが、父様は床に転がり蓑虫状態になってます・・・いいのでしょうか母様。

詳しい話は密室で？

とりあえず父様の事は母様に任せ、ガーディを2階の客間へと案内します。
客間にはベットとクローゼット、お茶を楽しめるようにテーブルとソファが置いてある。
お茶も先程中途半端になってしまったから別のものを用意しようと思ったのだけど、ガーディが必要ないというのでそのままソファへ腰を下ろした。

勿論、今度はちゃんと向かいの場所を確保しましたよ！

「素敵な御両親だね。ユリが幸せに暮らしてたのがよく分かる」
「うん、とっても素敵な人達なんだよ。私に由利（前世）の記憶がある事も受け止めてくれて、家族として受け入れてくれてる」

ガーディは静かに笑いながら私の話を聞いてくれる。
促されるまま、今迄の生活の事、魔術の授業を始めてる事、『癒し』の力を使った事などを話した。
私の話に頷き、時には質問してくるガーディの顔は大人の顔で、昔の面影はうすれ、時の流れを感じずにはいられなかった。
見た目は若くとも、永い年月が経っているのだと――――

「ガーディはなんで私が転生する事を知ってたの？」

現れた時、漸く戻ってきたと言っていた。
私が転生するってことを知っていた事になる。
でも、何故生まれた時に現れなかった？
私は生まれた時から記憶があった。

ーーーーー違うのは、『癒し』を使った事・・・・そして“陣”が現れた事。

「ユリが転生するのは分かってたんだ。でも、それが何時で何処に生まれ変わるかまでは分からなかった。探し出すにも反応するモノが現れなければ分からないし」

「反応するモノ・・・っコレ？」

咄嗟に胸元を押さえてしまう。

「そう、あの時俺たちの足元に描かれていた“陣”。今は４つに分かれているが元々は１つの“陣”なんだ。ユリが魔導師(あいつ)に殺されてからの話になる。・・・・話してもいいか？」

こちらを気遣うように辛そうな瞳で尋ねてきます。

まったく、あの時泣き叫んでいた子供と同一人物とは思えないほどの成長ぶりです。

皆を巻き込んで守る事も出来ず、さっさと死んでしまった私の事なんてそんなに気遣う事は無いのに・・・ガーディ達の方があの後もきっと苦労してきたのだと思う。

いつまでも過去に脅えるのではなくて、あの時に起こった事に向き合わなければならない。

陣の発動、ガーディ達が得た力、すべてが由利の「死」が引き金だったのならなおさら・・・

「うん、ちゃんと聞かないとね。話して・・・ガーディ」

＊＊＊＊＊＊

ーーーーーあの日、魔導師の魔術の刃はユリの心臓を貫いた。
“陣”の上に彼女の血が飛び散り、反応するかのように“陣”は青白く光り始めた。
黒いフードを目深にかぶる魔導師の表情は見えなかったが、低くしわがれた笑い声が耳についた。

「漸く、私の願いが叶うのだ。永きにわたる時を待ち続け、ようやくこの力が手に入る・・・これで」

青白く輝く“陣”は空中に浮き上がり、引き寄せられるように魔導師の元へ動き始めた。
しかしそれを遮る光が上がった。
ユリの身体に取り巻くように光る淡い金の光、その光の粒が“陣”を包み込み砕いた。
いや、砕けたかのように見えた“陣”は小さな3つの青い光となって、ユリにすがる3人の子供達の元に舞い降りた。
青い光は子供達に吸い込まれるように消えていった。

「かえせ！それはオレのものだ！」

魔導師はガーディアルの胸ぐらを掴み彼の中に消えた“陣”を取り出そうと、枯れ木のような指をガーディアルの胸に突き立てた。
魔導師の指先から別の“陣”が現れ、それに応えるかのように彼の胸元が青く輝き始めた。

「やめろ〜〜！」

ガーディアルは魔導師の手に渡すまいと抗うが、どうする事も出来ずただ、叫ぶばかりだった。
だがその時、体内から浮き出された“陣”はガーディアルの声に反応するかのように輝きを増し魔導の“陣”を粉粉に砕くと、一層輝き始めた。
“陣”はガーディアルの魔力を吸収しながら輝きを増しているようであったが、彼にはそれを止めるすべがなかった。
ガーディアルの意思に反し、光は大爆発を引き起こした。
その威力は村を丸々のみ込み、爆風と共に辺り一面荒地と化し魔導師はおろか、塵一つ残されてはいなかった。
唯一、残されたのは“陣”の力に守られた3人の子供だけであった。

＊＊＊＊＊

ガーディにとって辛い話をさせてしまった。
私の胸の方が潰れてしまいそうなほど辛い話だった・・・だったのだけど・・・何故、また人形劇なのでしょうか？
しかも今度は、操り人形で細かな動きまでＯＫ！、魔術まで使って光の効果演出って・・・ほんと、大道芸でやっていけそうな完成度でしたよ。
終わった後のやり遂げた感のある笑顔に拍手を送るべきか、一瞬迷ってしまいましたよ。
ーーーーーーでも流石に拍手は送れませんね。はい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7250x/

深淵に立つ癒し姫

2012年1月6日12時02分発行